

新大広報

Niigata University

CAMPUS FORUM

2001.3 No.139

Feature

卒業にあたって／退官にあたって

「こちら就職部」
「健康コラム」

首のリンパ節が腫れたときには

「キャンパスあれこれ」

新潟大学全学講義／『新潟大学キャンパスメール』発刊！／サークル“N”写真展

卒業を祝して

平成13年春、蛍雪の功なり、新潟大学を卒業する皆さんに、心からお祝いを申し上げます。新潟大学は誇りと自信をもって、皆さんを社会に送り出します。

新しい世紀のはじめにあたり、激動の百年を振り返りますと、二十世紀は、科学、技術が急速かつ著しく進歩した世紀でありました。産業経済は飛躍的に発展し、知的交流は国境を越えて深くなり、地球は著しく狭くなりました。また、医学の進歩は、生命の神秘を解き明かし、難病を克服し、人類の生活は著しく向上しました。しかし、私達は、その代償として、地球環境の破壊、資源エネルギーや食糧の不足、人口の爆発的增加と少子化、高齢化の矛盾、多くの地域における宗教や民族の対立による殺戮など、難しい問題を抱えています。

今世紀は、私達がこれらの問題の解決に真剣に取り組まなければならない時代であります。生命の根源に迫り、新しい生物をも創り出す生命科学、新しいエネルギーを創り、美しい自然を取り戻す工業科学技術、世界の学術の成果や情報を瞬時に共有出来る情報伝達科学技術は、今後ますます発展することと思います。

また、これらの成果を真に人類全体の幸福に役立てるため、私達は民族、宗教、思想の違いを越えて、お互いに努力しなければならず、ここで人文社会科学の果たす役割は極めて大きいのであります。

我が国は、明治維新の開国以後、急速に近代化を実現し、また第二次大戦の挫折を越えて、奇跡ともいうべき復興を実現しました。しかし、大戦後半世紀を経た現在、政治、経済、産業、学術研究の仕組みに制度疲労がおこり、新しい世紀を生き抜くためには、思い切った改革が必要であるといわれています。若い世代の殆どが高校に入学し、その半数が大学に進学する現在、大学は大衆化して、卒業生は社会の期待に応えていないと批判されています。たしかに、学歴は徐々にその価値を失っていますが（学歴エリート）の消滅）、幅広く、奥深い教養と専門分野の優れた学識と技術を備えた、機能としてのエリートはますます求められています。



新潟大学長 荒川 正昭

G r a d

大学を卒業する皆さんは、常に志を高くもって、自らの目標に向かって、果敢に、そして創造的に、挑戦してほしいと願っています。新しい時代に求められる人材は、足元をしっかりと見据えなが

ら、目線は高く置いて前方を見つめ、勇気と創造性に溢れ、私のためだけでなく、公のために貢献出来る若者であります。皆さんを迎える先輩は、皆さんが何が出来るか、何がやりたいか、そして徹底してやり抜く決意の有無を問うており、皆さんの情熱と気概に大きく期待しているのであります。

私達日本人は、物真似上手ではあるが、新しいものをつくるのは不得意であると、したり顔で批判する人もいますが、いささか事実と違うように思います。我が国の明治以降の近代化、大戦後の復興の歩みには、私達の先達の独創的な力を見ることが出来ます。しかし、創造力は単なる閃きや思い付きではなく、基礎的な学力の充実があって始めて発揮されるのであります。皆さんは、大学において、それぞれの専門分野の基礎を十分学んだことと思いますが、さらに磨きをかける努力が大切です。古来、日本人の特性といわれている勤勉、真面目、几帳面、実直な生き方、そして伝統的な精神ともいえる創意工夫が、日本のモノづくりとして、世界に知られている創造性を支えていると思います。今問われているのは、私達がその心の在り方を失っているのではないかとということです。

私は、皆さんが新しい門出にあたり、心新たに、生涯勉強の気概をもって、人生に挑戦してほしいと申しましたが、同時に自分を取り巻く人達、世間への心優しい思いやりを忘れないで下さい。私は、四十年以上にわたって大学人として教育と研究を行ってきましたが、同時に、病に苦しみ、悩む患者さんのために働く医師でもありました。私が医師として、常に心においたのは、「人の為に生活して、己の為に生活せざるを、醫業の本體とす」（緒方洪庵：扶氏醫戒之略）という言葉であります。医師という存在は、あくまでも患者さんのためにあるもので、医療という仕事には、迷わず全力をあげて患者さんの命を救う心が求められているのです。「人の為に生活して、己の為に生活せざる」、誠に厳しい言葉ですが、そこに流れているのは、単なる奉仕や自己犠牲ではなく、苦しみ悩む人間を思いやり、人間として極めて自然な心であります。只与えられるだけでなく、自ら与えることを喜びとする、人間が人間である高貴な心であります。

最近のマスメディアをにぎわしている、若い世代の暴走、政、財、官、さらに大学にまでみられる不祥事の数々、病める人々、年老いた人々、弱い人々への思いやりを欠いた介護など、私は、私達が何か大切なものを忘れてきたのではないかと、心を痛めています。我が国の現状を評して、高学歴無教養社会であるという批判がありますが、大学で学び培った学識と知性、周囲の人々を思いやり、美しいものに感動する感性を、生涯勉強することによって磨きをかけ、自らの品性を高めてほしいのであります。

皆さんが、心身ともに健康で、大きく成長し、我が国の発展と人類の幸福のために活躍することを期待して、私の送別の辞といたします。



特集

卒業にあたって・・・C.f.3～
退官にあたって・・・C.f.11～

u a t i o n



Ioana Balfag
Postgraduate student
Department of Fixed Prosthodontics
Faculty of Dentistry, Niigata University

Life and study in Niigata

大学院歯学研究科歯学臨床系専攻 I. パルタグ

I came from Romania as a research student, in January 1996. As many newcomers to Japan, I was very worried about my ability to live away from my family, to study in a foreign country and to adjust to foreign customs. Once in Niigata, I realized that I was surrounded by many kind people ready to help me in my study and to accustom to my new life. In less than one month all my fears had completely vanished and I was able to concentrate with joy on study and research in a faculty provided with the best high-technology equipment. As soon as my Japanese speaking ability improved a bit, I could make many friends inside and outside the faculty. Through them I got acquainted with Japanese life, food, and customs. I will never forget the annual parade across Bandai bridge on August 8th, the fireworks of Niigata and Nagaoka summer festivals, the beauty of rice fields in spring and of camellia blooms under the snow, the sunset over Sado Island. I can hardly believe that five years already flew away. It's difficult to enumerate in a few words all the good memories I am taking back home with me. I will miss a lot the kind advice of my mentors, the parties with my colleagues, the walks by the seaside, the "onsens", the taste of Niigata's rice, and so many other things. And I still have so much to learn in Japan. I really hope I will have the opportunity to come to Niigata again.

感謝

経済学部経営学科 李 春梅

あっという間に日本に来て五年目になり、それに今年日本の留学生生活はこれで終わる事になってしまい五年間本当に忘れられない事がいっぱいあった。日本に来る前に北京空港で両親との別れの涙、最初のホームシックの涙、それから初めてのバイト先の洗い場でのプライドの涙、それに新潟大学の合格通知書を見た時おもわず嬉しい涙。…いつもニコニコしている私にはそんな泣く姿は想像できないだろうが今から振り返るととてもいい思い出と思っている。もしも両親から離れないと家での温かさを知らずに自立さえもできなかっただろう。もし中国から出なかったら客観的な考え方、見方を持ちにくかっただろう。もしもバイトしないとお金の重さ、親の辛さを感じにくかっただろう。もし日本語学校で一生懸命頑張らなかったら新大に入る事ができなかっただろう。留学を通じて、人生には悲しみがあれば喜びもあり、マイペースで努力すればいつか大きな力になるというのを学んだ。

本人前



本人後列

夜間主コース万歳！

法学部法政コミュニケーション学科 本永 あかね

働きながらの大学生活は、仕事も学業も中途半端になり、物足りなさが残るものだったが、夜間主コースで学ぶことで得たものは予想以上に多かった。夜間主は、聴講したい授業が開講されないとか、通年でゼミが開講されないなど不利な点が多く、何を勉強したのかわからないまま卒業の時期を迎えてしまったが、私の場合、大学で学んだことといえば、講義の内容よりも、先生方を含めた様々な人との交流の中で得た人生の教訓だったかもしれない。年齢や職種の違いが集まる夜間主コースは、私が大学で勉強するには最適の場所であったといえる。新大祭に参加したかったとか、サークルに入りたかったとか、新潟大学でやり残したことはたくさんあるが、卒業代わりに書いた懸賞論文で賞をいただいたし、私には無理だと思っていたイギリス短期語学留学も実現させた。“やる気”と少しの“勇氣”さえあれば不可能なことはないのだ！ということを実感できた貴重な4年間だった。

「大学生活を通して」

人文学部行動科学課程 上之山博文

部活、サークル、アルバイト、友人との遊び、恋愛、ゼミ、卒業論文、そして海外研修etc 大学生活を振り返ってみると、本当に様々な経験をする事ができた貴重な4年間だったと改めて実感します。

私が大学生活を通じて最も実感したこと、それは「出会い」が自分を成長させてくれた、ということです。書ききることのできない「出会い」を経験してきましたが、ここではバイトの先輩を少しだけ紹介しておきたいと思います。本人がよく口にしていた言葉として「大物」「根拠のない自信」「天才」etc。現在、某新聞社勤務、バンド活動の傍ら現在小説家を目指し執筆中。最終目的はトレジャーハンター。その人とは梅雨時期に一緒に新川に飛び込んだこともありました。

いろいろありましたが、卒業後も出会いを大切に、貪欲に吸収しながらまじめに将来を楽しんでいこうと思います。4年間お世話になった、出会ったすべての人々に感謝です。



Feature : 学生生活



大学の使い方

人文学部地域文化課程 長島 由紀

これまでの人生における三大事件を挙げるとしたら、私にとってその一つは留学です。

入学当初から私は、海外生活と語学力を生かす職業に対する憧れがありましたが、ようやく受験勉強から解放されてみると、サークルとアルバイトに精を出す毎日。こんなときそろそろ居心地の良いぬるま湯から出る時だと教えてくれたのは、二年生の秋に聴講したある集中講義でした。それはアメリカ人の先生によるアメリカ文化と宗教に関する講義で、そのほとんどが英語で行われました。この時はじめて「手段・道具」としての英語を認識し、ぼんやりと描いていた未来の自分に近づくためには、まず英語という「道具」を自由に使いこなせるようになることが第一歩であると気づき留学を決心しました。

できるだけ多く英語の授業に出席したり、親しい外国人の先生とお茶を飲みながら会話を楽しんだり、学外では国際交流のイベントに参加したり、できるだけ多く英語に触れる機会を作りました。一方では、自分にあった留学を見つけるために先生方や友人

『前途は洋々、友達は様々』

教育学部小学校教員養成課程 牛腸 育子

新発見を求めてか、孤独から逃れるためか。入学当初のあなたは友達づくりにせっせと励むでしょう。その努力の甲斐あってあなたにはきっとたくさんの友達ができるでしょう。しかし私の経験を言えば、そうやって知り合った友達とのつきあいをすべて維持するのは無理です。友達づきあいに使える時間、お金、そしてあなたの我慢にも限界があります。当然同じ友達でも親しさに差が出てきて、友達と知り合いの境界が曖昧になり、そもそも友達とは何かという疑問にぶつかります。

私はこの疑問を卒業論文のテーマにし、一つの結論を得ました。「友達づきあいは多様でOK」ということです。友達をつくらないのも一つの選択ですし表面的なつきあいも友達づきあいの一つです。友達づきあいはお互いがよりハッピーになるように創り続けていくものです。ですから「友達つくらなきゃ」とあまり肩肘張らずに、お互いが居心地よいつきあい方をみつけていってください。



前列右から2人目

を通じて情報を収集しました。

決意から2年後、私はアメリカに渡りました。そして今、5年前の漠然とした未来像は現実になりつつあります。人も情報も多方面から集まる大学の可能性は無限であり、私の人生においても大きな分岐点となりました。もし留学していなかったら…。私には、もう一つの未来像を想像することは出来ません。そして留学がこれからも私にとって重要な出来事であることは変わらないと思います。

あなたはどんな出来事を挙げますか？

大学生活で得たこと

大学院教育学研究科書道教育専修 本多 和宏

年を追うごとに加速的に時間が進んでゆく大学生活…。私は6年間、書道科に在籍し、書道が生活の中心であった。学部生の頃は、バドミントン部と書道科を、慌ただしく行き来し、部活動をした後に書展の作品を制作する生活が続いた。大学院に入学してからは、完全に書道中心の生活を送り、公募展出品、学会発表を2年続けて行うなど、大変有意義な2年間であった。

私が書道や部活動から得た財産は、ここに書き尽くせないが、その中でも特に、「成せば成る」という言葉を実践し、実感できたことは大きな自信になった。途中、行き詰まって苦しい時も多かった。しかし、「ここで限界だ。」と思わないように心がけ、自ら課題を立てて行動してみる。そして、やるからには徹底的にやることである。

このようにして、納得のいく六年間を過ごすことができた。その陰に、先生方や友人、両親など、多くの人の支えがあったことに感謝したい。



「胸中海嶽(きょうちゅうかいがく)」書道科展出品

“これからも。”

経済学部経済学科 三浦 広行

私が新潟大学経済学部で過ごした4年間は、思い起こせばさまざまなことに挑戦してきた日々でした。迷ったときは、“今自分にできることは何か？”ということを考えて、できるかぎり“自分のやりたいこと”をやってきたつもりですし、その過程で出会った多くの友人達と交流し、自分の視野を広げることができたことが、この学生生活一番の収穫でした。

そして、2年次から始まったゼミ活動は、周りのみんなと刺激しあって、自分なりに集中して取り組むことができたので、自分の学生生活の“軸”になったと自負しています。

新年度からは社会人となり、厳しい世界が待っているのですが、この4年間で得た経験を生かし、これからも前向きにがんばっていきたいと思っています。

最後になりましたが、今まで私を支えてくださった先生、友人達に感謝いたします。本当にありがとうございました。またお会いできる日まで、お互いお元気で！



学生生活：Feature



大学生活を振り返って

経済学部経済学科 萱場 龍一

早いもので、この大学に入学してから4年が過ぎようとしている。経済学部の夜間主コースに入学した私にとっては、長いような、短いような不思議な4年間であった。この間、昼間働いて、夜勉強するという生活であったが毎日が充実していた。

大学生活を振り返って、毎日が充実していたと言えるのも「時間」の大切さが重要だということを学んだからであろう。仕事、勉強、遊び、趣味、睡眠などすべてが私にとって貴重な時間であった。時間を有効に使うか、使わないかで毎日が充実したり、しなかったりする。どうせ同じ時間を過ごすなら、私は今ある時間を大切に、後悔しない毎日を送りたい。

最後に、私は、本当に多くの人達に助けられ、支えられてきた。周囲の人達からの協力なしではここまでやることが出来なかっただろう。お世話になった先生方をはじめ、両親、職場の上司や同僚、大学の友人にはこの場を借りてお礼を言いたいと思う。



give されてばかりだった

医学部医学科 宗村 紀子

長かった学生生活が終わろうとしている。医師を志す時期が人よりも遅かった為、私はクラスメイトよりも長い学生生活を送った。年下の友人達の中、頼られ事も多く、自然、自分の問題は自己処理する癖がついていた。卒後の進路決定も自分で決めたが、結果的には、直前で科を変更するという醜態を演じてしまった。そんな事の顛末を、仲の良いドクターに、何気なく話した。途端、真面目な面持ちで私の考え方の甘さを指摘された。突然のことに、私は驚き、次にむっとし、最後には、納得した。その人の心からの助言と理解したからだ。

それまで、私は、自分のことは自分が一番よく分かったと思っていた。他人に助言を求めるときでも、常に、最初から答えを持っていたように思う。しかし、他人の方がよく分かることもある。思えば、私の周りには、素敵な助言を与えてくれた人が、たくさんいた。年下の友人達の中にもだ。どうして、もっと耳を傾けて来なかったのか。これからは、私も与えられる人間になりたい。今まで与えられてきた、たくさんの思いやりは何らかの形で答えたいからだ。心底、そう思う。

卒業を前に

医学部医学科 森 俊平

卒業を控えて振り返れば、多くの得難い出会いがあった。六年間共に過ごした仲間もあれば、ほんの一時、同じ時間を過ごしただけの人々もいた。それぞれの人が皆それぞれに俺には無い輝きを放っていて、ただただ素直に感動させられた。彼らを鏡にして振り返ってきた自分自身は、どうしても小さくて、下らぬ男だった。総じてこの六年間は、俺は何者なのかを深く考える日々だったが、おかげでどうやら、現時点で目指すべき方向が見えている気がする。彼らの輝きの前に、俺もまたかくありたいと思って営む毎日だったが、卒業を目前に控えた今、入学当時と何も変わらぬ堅くて融通の効かぬ男がますます悪くなって在るだけなのかもしれない。つくづく俺はいい出会いに恵まれた果報者だと思う。縁とは言いながら、彼らと出会わなければと思うと恐ろしいような気さえる。卒後、それらの人々と別れるのは正直とても寂しい。本当に何物にも代え難いと思う。だが今は前を見れば、恐らくまた、そくそくするような出会いがこの先俺を待っている。どんな凄い人が、そう考えると楽しみでならない。



本人右端

Feature : 学生生活



本人中央

四年間をふりかえってみて

農学部農業生産科学科 越 洋

専門高校から入学してきた自分にとって、四年間で最も大きな壁が英語であった。教養必修の英語では、苦痛であった記憶しか思い出せない。そんな時、平成11年度から農学部には、英語・化学・物理の補講制度が導入された。その中で英語を補講した自分は、教授や仲間の協力もあり、基本的な知識を学ぶことができたことに今でも大変感謝している。しかし、本来、学問の基本となる基礎は自ら学び、高度な学問を学ぶところが大学なのであろう。現在、大学生の学力低下が問題となっている。その中で、基礎知識に欠け、補講を受けていたことは、教育目標にある「教育の充実と研究の高度化」に対し、足手まといとなっていたかもしれない。今となって非常に悔やまれる。最終学年となり、このことに気付くとは遅すぎたかもしれない。この状況を改善するためには、早めの目標設定、目標を達成するための素早い行動、が不可欠である。

旅立ち

歯学部歯学科 山崎 佐保里

6年間を振り返ってみて、勉強や実習が大変だったことや頑張った事が思い出されるのはもちろんのことであるが、それと同時に、楽しかった旅行なども思い出される。

新潟のあちこちに温泉がある事と私の温泉好きが功を奏し、いろんなお湯につかった。「はあ〜、極楽極楽」なんておばさんぽいけど、試験が終わった後に入る温泉は本当に極楽極楽。

海外旅行は4年生の夏にヨーロッパ、6年生の夏にアメリカへ行った。ヨーロッパ旅行は1ヶ月の夏休みを利用して、ベルギーでのホームステイ及び周辺の国々を訪れて、建築物、美術館巡り三昧であった。大学時代にしかできない貴重な経験であった。それにしても、英会話が全然上達しなかったことは非常に残念である。卒業後も、私の課題の1つになりそうである。兎にも角にも新しい旅立ちに際し、6年間の経験を大いに生かしたいと思う。



本人 後列右から2人目

自分自身と向き合えた3年間

医療技術短期大学部看護学科 風間 藍子

看護について学んできた3年間、一日一日を乗り越え、一気に突っ走ってきたような気がします。

看護は人とひととの関わりです。患者さんを中心に多くの人との出会いがありました。患者さんと関わる中で、看護の知識や技術を学習させてもらったのは勿論のこと、私は自分自身について考える機会を与えてもらったと考えています。患者さんと向き合うことを通して、自分と正面から向き合い、自分は何を考え表現したいのか…気づいた自分、見えてきた自分が多かったと思います。また、思うように行動できない自分に焦ったり苛立ったりしたとき、支え、力強く背中を押してくれたのは、周りにいる仲間でした。

多くの出会いと関わりに支えられ、自分探しとともに進んできた道のりで得たものは全て、私にとって、これから新しい環境へ前進する原動力です。この原動力を胸に、自分の信念をきちんと持つ看護者でありたいと思います。

キャンパスライフについて

医療技術短期大学部診療放射線技術学科 伊藤由香里

医短に入学して3年。この3年間は、本当にあっという間に過ぎ、学生生活の終わりを最近特に実感しています。

医短で過ごした3年間で「実習発表会」は私の中で忘れられない思い出になりました。この発表会の準備のため、毎日実習が終わった後も病院に残り実験し、また大学に戻って話し合い…と帰りも遅く、なかなか納得できない自分に苛立ち、仲間にも迷惑をかけたと思います。しかし、この仲間や周囲の協力があったからこそ、最後まで頑張って1つのものを完成させることが出来たと思います。発表後に感じた達成感・喜びは、これから社会人となる私の大きな自信になると思います。

私が学生生活を楽しく過ごせたのも、人間として成長できたのも、今までに出会った沢山の人達のおかげだと思っています。これからもその1つ1つの出会いを大切にしていきたいと思っています。



本人中央

部活の思い出

法学部法学科 横山 志保

「ご趣味は?」「お茶を少々」

こんな会話に憧れて裏千家茶道部に入部したのは1年の4月でした。大学に入学したばかりの頃は、したいこともたくさんありました。部活はもちろんですが、ほかにもバイトに旅行、友達と遊んだり、それから勉強も。週2回の練習はそれほど負担にならないはずでした。部活は部活、あとの時間は有意義に、と考えていたのに、気がついてみればよく遊ぶ友達は茶道部の人、バイトも茶道部の先輩の紹介で。最初の思惑とは多少違いましたがともかく私の大学生活は茶道部のおかげで順調に始まりました。お茶の練習だけではなく、お茶会の準備に旅行の計画、各種イベントを準備して…と、茶道部中心の生活が続きしました。

そんな私の日々も、少しずつ変わってきました。なかでも、1年間の韓国留学が大きな転機になりました。部活の他にも大切なことがどんどん生まれてきて、だんだん部活から遠のいていきました。お茶会に出るのも、その準備も練習も楽しくて好きですが、今の私にとって、茶道部はそれほど大きな存在ではありません。それでも、大学で何をしたか、と問われれば、「茶道部」と答えると思います。一番ではありませんが。



学生生活 部活：Feature



Tigers American Football

工学部情報工学科 望月 伸一

最初このアメフト部は上下関係や練習などが厳しいものだばかり思っていたのですが、いざ入部してみるとそれまでの考えが全て覆されました。上級生と下級生の区別がつかないほど上下関係が無く、活動内容も完全に学生主体で、拘束されることもなく自由な部でした。にもかかわらず、部内のモラルはしっかりしており、何よりもまずその勝利への貪欲な姿勢は他のどの体育会よりも強いものだと思います。そして4年間この部でやってきて得たものは、数多くの勝利の喜びと、そして一つの目標に向かって仲間全員が一丸となって進んで行く事の大切さ、又、それらは周囲の人々の協力無しでは絶対に成し遂げることの出来ないものであるという事。これらはきっとこれからの人生の糧となってくれると思っています。最後に今まで一緒にやってきたチームメイト達、又、監督、コーチを始めとするタイガースに携わってくださった方々へ、本当に有難うございました。



本人 コート内右側

サークル、部活等について

医療技術短期大学部衛生技術学科 佐藤 文昭

自分の三年間という短い学校生活を振り返ってみて大きかったことは部活に入ったということです。初めは大学生活の中でできるだけ多くの知り合いを増やしたくて入部しました。僕が入った年は医短からは男が僕だけで心細かったのですが、先輩に可愛がってもらい、そのうちに医学部の同級生とも仲よくなり次の年には医短から五人の後輩が入ってきて新大の中だけでなく部活を通して他県の大学とも交流があり本当に多くの人達と出会うことができました。その甲斐あって僕の学校生活は本当に有意義なものとなりました。休みには友達とどこか遊びに行ったり、お酒を飲んだりと暇とお金の無い毎日を送っていました。こんな事ばかり書いていると遊んでしかいないと思われるので困るので、因みに学校はもちろん真面目に行っていました。今思い起こしてみてもよく動いていた三年間でした。皆さんに「本当にありがとうございました。」と同時に「これからも宜しくお願いします。」バドミントンの市民大会で二回優勝したぞ。僕は合唱部にも入っていたようです。キーワードは勉強、部活、酒、車、タバコです。

『新越後物語』を通して

人文学部情報文化課程 吉野 剛

昨年、私たちのゼミでは新潟国際映画祭において、約50年前に新潟で撮影された『新越後物語』という映画の上映に参加しました。映画祭実行委員会のご協力をいただき、映画祭のオープニング・イベントとして上映することになり、私たちは併せてトークショーや資料の展示なども企画しました。当日はたくさんの方に来場していただき、見事成功を収め、ゼミ生全員にとってかけがえのない経験になりました。

上映が成功に終わった後、私はこの映画をさらに掘り下げてみたいと思い、卒論の題材にとりあげることにしました。この映画の背景にあった当時の新潟を知るために、撮影スタッフとして参加した方や舞台となった地元の方などにお話を伺ったり、当時の新聞を調べたりしました。一本の映画を巡って、いろいろな方との交流が生まれるとともに、郷土の歴史にも触れ、新潟に住む自分自身を見直す貴重な機会を持つことができました。



Feature : ゼミ・卒研・研修



本人後列右から2人目

学生最後の1年を振り返って

理学部化学科 丸田 和幸

長かったようでとても短かった大学生活。特に研究室に入ってから1年間はあっという間に過ぎてしまいました。3年生までは教えられているだけの勉強であり、実験においてもある程度結果がわかっていました。卒業研究は全くの「未知」であるものの研究であるため、結果が出ることによって興味が増し楽しくなり、そのことによって自分の行っていることを認識できて、大学に入ってから初めて自分から勉強しようという気持ちになりました。目的をもって勉強することの大切さを改めて実感しました。

また、勉強だけではなく楽しいことも多くありました。研究室の行事がたくさんあり、ゼミ旅行では長野、山梨に行きました。学生最後の年に旅行ができ、とてもよい思い出になりました。研究だけではなく思い出に残ることも多く、とても充実していて大学生活が凝集されているような1年間を過ごしたような気がします。

卒業研究を終えて

教育学部小学校教員養成課程 井村 真理子

憧れの大学生生活がスタートし、一年があっという間に過ぎた。友達もたくさんでき、授業にも慣れた二年生も後半になったころ、ゼミの専攻を決めることとなった。高校時代に学んだ『源氏物語』をより深く学びたいと思い、古典ゼミに入ることに決めた。物語の中の一人の人物に着目し、その人柄や気持ちを深く掘り下げていった。初めは一面だけしか見られなかったが、先生のご指導や、先輩、同輩達らの指摘などにより、研究の方向性が見つかり、自分の気付かなかった事柄が発見できた。本当に多面的な見方ができるものだと驚きの連続だった。このように二年間も一つのテーマを追求するということは、学生時代にしかできないことである。この経験を生かし、人生を豊かなものにしていきたいと思う。



本人右側



本人右から5人目

「所謂青春の1ページ」

理学部地質科学科 佐藤 洋子

我々の地質科学科は学内の数ある学科の中でも、最も、巡検等で野外に出る機会が多い学科でしょう。

その巡検の中でも1番のイベントが「大巡検」です。これは2年の春休みに学年全員+引率の先生方と、10日間ほど遠隔地の地質を見学して回るものです。我々の学年は中国・四国地方に行きました。新潟では見られない珍しい岩石や構造を見学し、とても有意義な巡検となりました。一方で、皆で新潟から集合場所の山口県まで鈍行列車で1日以上かけて行ったり、途中で誕生日を迎えた友人を祝ってあげたり、連夜の酒盛りで二日酔いになったり、他にもここには書けないような事件を起こすなど、学生時代にしか出来ない体験をいろいろしました。

各地の美しい風景も、ちょうど見頃だった桜とあいまって忘れられません。準備から全日程終了まで何かと揉めたりと、大変なこともありましたが、学年全体の貴重な思い出が出来ました。

病院実習

医学部医学科 向井 玄

医学部の学生は約二年間病院で実習を行う。実習期間中は様々なことがあったが、一番印象に残っているのは外科の実習での患者さんとの関わりである。実習中は毎朝患者さんのところへ行ってお話を聞き、所見をとるのであるが、そのうちにこの患者さんと仲が良くなって雑談も多くなるようになった。手術も見学し、術後は患者さんから手術中のことを中心にいろいろ質問されたが、答えられる範囲で一生懸命答えた。

一つの科の実習は二週間なので、一人の患者さんの入院から退院まで担当することはまれである。この外科での患者さんでも例外ではなかったが、ある日この患者さんから手紙を頂いた。そこには退院したこと、および学生である私に対する感謝の気持ちが書かれていた。

医者や医療全般に不信感がますます強まる今日この頃であるが、病院実習でのこのような経験を大切にしていきたい。



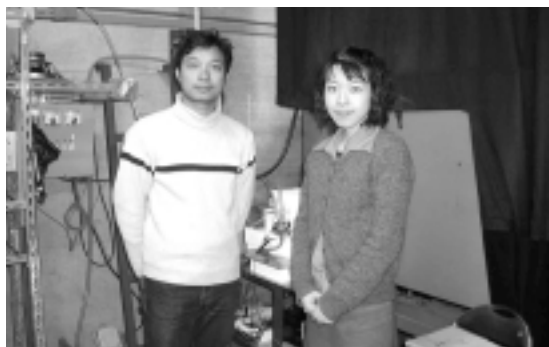
卒業にあたって

歯学部歯学科 平原 泰樹

早いもので、私が入学してから6年が経ちました。6年という時間があっという間に過ぎ去った感じがします。そして卒業を迎えるにあたり、最後の1年間に経験した臨床実習は、非常に貴重な経験でした。特に、実際に患者さんの治療をする中で、「コミュニケーションの取り方」という点で、普通では学び取れないことをたくさん学びました。これは本や普通の勉強の中ではなかなか学べるものではなく、じかに人と人との接さなければわからないものです。大学生活の中でそのような機会を得たということは非常に幸運なことで、これを卒後の糧とし、研鑽を重ねたいと思います。



ゼミ・卒研・研修：Feature



卒業研究について

工学部機械システム工学科 松田 望美

期待と希望、そして不安…といった思いを胸に入った研究室。私は新入社員になったような気分だった。初めは、一人一テーマである卒業研究をどう自分で進めて良いのか、戸惑うことばかり。昨年度までとの最大相違点といえば、正しい解答がないということだ。講義にしても実験にしても、答えがあることになれていた私は、常識にとらわれ、足踏みしてしまうことが多かった気がする。知識は必要であるけれども、新鮮なアイデアを出すためには邪魔な場合もあるのだ。

1年が経とうとしている今。先生が常々おっしゃっていた、「実験をしてみて初めて分かることが非常に多い。」という言葉を実感している。入った当初、ものすごく特別で優秀な人だけだと感じていた先輩方も、(多少の差は置いておくとして)初めから全てを理解していた訳ではないのだろう。経験一つ一つが財産となり得る。そういった意味で、この1年は今までの倍、もしかしたらそれ以上のものを得ることができたと自信を持っている。



研究室での1年間を振り返って

工学部電気電子工学科 吉田 俊貴

私は、福井研究室で超伝導の研究をしています。みなさん、“超伝導”という言葉はどこかで聞いたことがあると思います。たぶんほとんどの人は、磁石が浮かんでいるようなところや、リニアモーターカーなどを想像すると思います。私は超伝導体でできた電線を作る際の基礎的な研究をしています。研究といっても、夏休みが終わる頃までは実験で使用する大型コイルの設計・製作で研究らしいことはなかなかできませんでした。それが終わってからも、実験をしては工作をしての繰り返しでした。後から聞いた話ですが、この研究室の実験班は、特に実験に使うものを自分たちで工作するそうで、それは先生の影響のようです。また4月から大学院生としてこの研究室に残ることができるので、今の研究をさらに深くできればと思います。

私の就職活動から、大学に求めるもの

法学部法政コミュニケーション学科 小松 由明

現在、他大学との就職活動の協力提携など、就職活動の選択肢の幅を広げるという意味において、大学側のサポートが良い方向に進み始めているのは喜ばしいことだといえる。だが私が本学に求めるものは少し違う。それは、簡単に言えば、「情報提供の効率化」である。大学の手元にあるデータで差し支えないものであれば、例えばホームページで積極的に学生側に提供する体制を整備して頂きたい。最低限でも、資料室などに行かなければ見られないデータを、ネット上で見られるようにして頂きたいと思う。特に民間希望の場合、企業が学生を待ってくれない以上、時と場所を問わずにデータが閲覧できるというだけでも、学生はずいぶん効率の良い就職活動ができるようになるだろう。中でも、卒業生の有無は何かと知っておきたい情報だと思う。自分の就職活動時の経験を振り返れば、「この企業には先輩がいる!」、それを知っているだけで結果はずいぶん違ったものだったから。



Feature : ゼミ・卒研・研修



就職活動について

農学部生産環境科学科 鈴木 信也

就職のことについて初めて意識したのが大学2年生の時でした。自分のやりたいこととは何かいろいろ考えましたが、結局何も答えが見つからないまま時間は過ぎていきました。そんな中、専門科目の授業は増えていき、農業土木に強い関心を持つようになっていきました。そして、公務員のガイダンスに何回か出席して、公務員になると決めました。それが大学3年の4月で、すぐに公務員試験に向けて勉強をやり始めました。3年にもなると専門科目の授業だけとなるので、授業についていくのが大変でもい通りに公務員の勉強がはかどらなく、苦手の教養を十分に勉強することができませんでした。そして4年になり、卒論のみという状態で、時間にも余裕があったため、ほとんど毎日夜遅くまで研究室に残って勉強していきました。同じ部屋の友達たちも公務員を希望していたので、刺激を受けながら諦めることなく頑張ることができました。試験が始まると日程的に大変でしたが、何とか一つ合格することができました。この一年半の頑張りを忘れることなく、4月からは仕事を頑張っていきたいと思っています。

2000年就職活動を終えて

理学部数学科 井上 泰祐

就職活動を終え、感じたことを書いてみようと思います。みなさんの就職活動の参考になれば幸いです。

最近の就職活動のスタイルは、明らかにインターネット中心となり、就職サイトに登録したり、企業のホームページにアクセスしたりして、第一歩を踏み出すようになりました。ですから、パソコンを持っていないとつらいです。パソコンを準備しましょう。

「自己PR」について、これは「あなたは大学で何に力を入れていたか」などのかたちで、エントリーシートを書くときや、面接を受けるときに必ず聞かれるものです。企業が最も見たいところだと思うので、自己分析をしっかりとし、自己を思う存分アピールしましょう。

最後になりましたが、志望企業に思い入れをしすぎず、面接では自分について軽く語るくらいに思い、就職活動を楽しむぐらいの気持ちで臨めたら最高ですね。Enjoy 就活!



本人右側

アルバイトを通じて学んだこと

大学院自然科学研究科生物生産専攻 小島 悠子

私は接客業のアルバイトを4年間していました。長く続けたこともあり、アルバイトを通じて多くのことを学びました。割烹で行われる様々な行事や接客の仕方、お客様との会話からいろいろな考えを持った人がいるのだということなど、大学内の同年代の友人や勉強では学べない良い経験をしたと思っています。これらのことは、就職活動の際に、自分自身に対する自信になっただけでなく、働いてお金を稼ぐことの大変さも教えてくれました。これから社会人として自分自身や仕事の面で責任を持たなくてはならず、思い通りにいかないことや理不尽な要求をされることも出てくると思いますが、こういったことにも対応できるような心構えができたように思います。

私がこのアルバイトを通じて経験し、学んだことは、学生時代に身に付けたものの大きな割合を占めています。この経験を含め、大学生活で学んだことを胸に、4月からは新しい環境でがんばっていきたいと思っています。

教養について

人文学部教授 黒澤 岑夫

新潟大学での生活25年、長いといえば長いようでもあり、諸先生方に比べれば、あるいは短いというべきかもしれません。ともあれ、この間、大過なく―と自分で勝手に思っているのですが―職務に専念できたことにたいし心から感謝申し上げます。

大学も変わりました。いろいろな出来事もありました。比較的最近では、かつて私がおりました教養部（教養教育を担当していた部局）の廃止もそのひとつです。幸い、その後センターを中心に本学の教養教育が着実に実施されていて、心強い限りです。

ところで、ごく最近になって、新聞などで「教養の危機」なる言葉が語られるのを時折見かけます。その指すところは、いまのところ必ずしも明確ではないようですが、それはそれとして、新しい世紀のはじめに、地球市民として持つべき教養について考えることはとても大切だと思います。

どうやら、私たちの社会はこれから激動の時代を迎えるようです。上から下までまたまた急げ急げの大合唱のおそれなきにしも非ず、そうであればあるほど、飛んだ落とし穴に迷い込まないためにも確かなパイロット役の教養の備えは欠かせないでしょう。勿論、一口に教養といっても、別に規格品があるわけでもなく、ましてこれから求められるそれは私の世代のそれとはおのずから異なるでしょう。要は一人一人が考えること。教養とはなにかを考えることが教養のはじまりかも知れませんから。



退官にあたって

教育人間科学部教授 箕輪 久夫

声楽家の道を志して芸大へ入学、卒業後は曲がりなりにも演奏家、教員の二股稼業。その後縁あって新潟大学教育学部高田分校に赴任。学部統合、大学院設立、新課程改組などの節目を経験し、現在また改革の嵐の中、退官を迎える年になってしまいました。

なぜ歌の道を選んだのか。高校時代の恩師に導かれて音楽の喜びを知り、目に見えないものの命令に従って歌い続けてきたとしか言いようがありません。「あなたが歌えと命じる時に、私の胸は誇りにはり裂けそうだ…私の命の粗野なもの、不調和なものがすべて甘美な調和に融ける。…」これはノーベル賞文学賞を受賞したR・タゴール氏の詞の一部です。歌とともに一生を過ごせる幸せをありがたく思っています。二年前には患って、もう歌えないと思いましたが、幸い健康も回復し、学生たちに励まされて今日まで仕事を続けることができました。最近は合唱指揮や、オペラ制作等の活動が多くなり、歌を通じて学内外の沢山の人の人と楽しいお付き合いすることができました。昨年11月には新大室内合唱団が宿願の全日本合唱コンクールで金賞を受賞し、最後の年に何よりのプレゼントをいただきました。残った仕事はオペラ研究会の「フィガロ結婚」[3月20日 西新潟市民会館]です。また退官記念にリサイタルを開くことにしました。[4月8日 りゅーとびあコンサートホール]。曲目は「詩人の恋」と「冬の旅」です。ご来聴いただければ幸いです。新潟大学での三十余年間は歌の好きな学生たちに囲まれて本当に好きなようにやらせていただきました。皆様にはご迷惑をおかけしたことも多々あったと思います。どうぞお許し下さい。これからも自然体で楽しく暮らしていきたいと思っています。退官後も変わらぬご厚情をお願い致します。



1 / 16 最終回声楽セミナーコンサートで 於 音楽楼合唱ホール

Feature



36年間で、ありがとう

教育人間科学部教授 加藤 信一

「学生に伝えたいこと」といえるのかどうか、私が36年間に読んで感動した文をいくつかご紹介したいと思う。

「私は、道元禅師や芭蕉は、いずれも自身や直弟子などの書いたものによって調べたのには違いないのですが、いずれも活字によってでした。真跡の写真版によらないとよくわからないものがあることを教えられたのは、良寛さんによってです。

これらの人たちは今では皆私の親しいお友だちです。二千年にひとりという人たちとお友だちになれるとは、私は何という幸福な境遇でしょう。」(岡潔著『月影』、文化勲章を受章した数学者)

「やはり、原本（あるいは複製本）は見るべきものである。翻字本では知ることのできないものがあるいろいろ見えてくる。貞心尼の書が美しいなどというのではない。確かにいい字である。しかし、書道にまったくの素人である私が、美しいとか、いいとかいって感心していても始まらない。それよりも、私が原本を見て直観した第一のことは、その文字の中に、明らかに「秋萩帖」によったと思われるものが頻出することであった（中略）。

しかし、「秋萩帖」との関係については、すでに、新潟大学の加藤信一教授が指摘している。」(北原保雄著『青葉は青いか』、筑波大学学長)

「大地の上に春が来て開花し、秋がきて落葉する。然し大地は大地として開花落葉の母胎ながら黙ってゐる。言葉の奥には本来はさういふ沈黙がある。」(唐木順三著『良寛』、文芸評論家)



書道科合宿練習会にて
本人 前列左から5人目

新潟大学の34年間で21世紀に残したもの

法学部教授 小島 康裕

最近の新潟大学教授の地元におけるソーシャル・ステイタスは34年前とは比較にならないほど高くなったように感じる。私が福島大学講師から新潟大学人文学部の助教授として赴任したのは1967年の4月である。当時の新潟における大学教授とは医学部の教授であって人文学部の教授・助教授などは大学の先生として新潟の人々に扱われたかどうかはなほ怪しい。これはこの当時の新潟大学の評判としては当然であったように思う。とりわけ法学部の前身で私が所属した人文学部法学科は大学とはいえない酷さであった。



ここで私は多くの協力者を得て19世紀と20世紀のドイツ、フランスおよびイギリスの法学専門雑誌、判例集および資料集を集めた。アメリカの資料はお金がなくて買えなかった。しかし図書室の充実と全国から人を集めたことによって法学科に法学研究科（修士課程）が設置され、ついで法文学部（人文学部の名称変更）が三学部に分かれ法学科は法学部となり、1993年4月には大学院現代社会文化研究科（博士課程）が設置され、本学は博士（学術、文学、法学および経済学）の学位認定権を持つに至った。

文科系にも博士課程を持つ国立総合大学は15大学しかない。これは新潟大学の日本におけるステイタスを現している。このことを反映しているのがこんにちの新潟大学の教授・助教授に対する地域社会の尊敬である。新潟大学の21世紀の問題はここから始まる。

開かれた大学への胎動

経済学部教授 玉木 義男

20世紀は激動の時代であったといわれますが、いまから56年前の終戦の時には私は未だ国民学校（小学校）の4年生でした。終戦と同時に社会も教育も激変した事をおぼろげながら記憶しております。私が経済学部に着任したのは'66年4月ですが、35年前の当時の大学と大学を取り巻く社会と現在のそれとは、敗戦の時の激変と変わらない程に激しいものがあると思っております。まず、第1に閉ざされた大学から社会に開かれた大学になったこと（進行中）であります。赴任当時は産学共同などという言葉は禁句であり、民間企業とは勿論のこと県や市との共同研究や新聞やTV等に出る等は学者の風上にも置けない墮落した行為であるという雰囲気が充満しておりました。ところで、現在は「開かれた大学」とか「社会貢献」の名の下でそれ等の行動は奨励され推進され、さらに、それ等の行為は点数化され教官個人の評価の点数にまでされようとしております。それと共に、60年代に教育界に登場した偏差値や国立大学の1期校・2期校制の廃止、共通1次試験・センター試験の導入、激しい大学紛争、大学への進学率の上昇等々を通して学生の意識も教官の意識もまた市民の大学に向ける目も大きく変わりました。ところで、大学はさらなる開放を求められていると共に「独立行政法人化」で大きく変貌するものと思われます。この激しい変革期に、全教職員と学生は団結してこの生みの苦しみを乗り越えて、地域の拠点校としての立派な大学を創られることを祈念いたします。



Feature



回顧と反省一学生たちとの30年—

経済学部教授 諫山 正

私が新潟大学に着任したのは33年前のこと、当時ありしことの多くは茫々たる視界にある。それでもゼミナリストンとゼミナリストイネンとの交流だけは鮮明だ。初めの頃は、演習が終わると毎週のように喫茶店に出向いて、文学、映画、そして人生に関するすべてについて語り合った。コンパでは、大学紛争の最中とあってしばしば学生同士で激論となったが、宴の終りには肩を組み「琵琶湖周航の歌」を唄って散会したものだった。

それでもまだまだ学生とのコミュニケーションが不足だと、ゼミ合宿を思いつく。夏休みは3泊4日位で信州山麓に宿をとり、2日間は文献の輪読か社会人となった先輩達の職場体験報告、1日はレクリエーションという具合。レクの方は私の年齢に応じて、登山、テニス、散歩と変化していった。北アルプスの軽い山行に始まり飯豊、朝日連峰の縦走もあった。山中で一緒に過ごす日頃は見えない学生一人一人の個性を発見する効用もある。演習では寡黙な彼らも課外では生き生きとして実に多士済々だ。



しだいに学内外の仕事が多忙となり、当初のようなく荒っぽいが親密だった>学生たちとの交遊の機会を十分に持つことが出来なくなった。顧みて当時の学生諸君には申し訳なく内心忸怩たるものがある。演習の雰囲気も随分変わり、「ゼミ崩壊」の雰囲気さえ感じたこともある。学生の無気力を嘆いたこともあったが、私も反省するところが多々あった。最後の年の演習では初心に返り、寺子屋の師匠のつもりで学生たちに対した。さてその成果はどうであろうか。20数年後に卒業生諸兄姉による「評価」を聞きたい。

退職にあたって

理学部教授 石澤 進

新潟の生活：「光陰矢のごとし」の諺のように新潟での生活は、長い人生とは裏腹に瞬時に通り過ぎた感じが強い。1954年に新潟大学農学部に入學して卒業と同時に大学に残り、途中理学部に移籍し、46年もの間、新潟での生活が続け、新潟に定着しながら、何をして生活してきたかと問われても答えは淋しい限りである。

学生との交流：学生とは、農学部時代は農作業、理学部時代は野外実習での印象が深い。卒業生に出会った時、実習の際に、もう少し野外の植物について知る努力をしてあげた良かった、と反省を述べる人が多い。野外で実物を目の前にして学生と接する機会を多くし、植物に関する理解を深める工夫をすべきだったと反省している。

地方大学の役割：新潟の地に生育する植物の実態を明らかにすることが重要と考えた。日本海側を代表するユキツバキの分布と共に、その他の植物の分布も明らかにすることが、地域と結びついた地方大学の役割であると思い、20年以上かけて「新潟県植物分布図集」第1～20集まで刊行してきた。この図集の出版によって新潟県の絶滅危惧種の選定に大きく貢献し、その役割の一端を担ったと思っている。最終の目的は分布図をもとに分布要因の解析にあったが、未完成である。将来の問題解決の基礎資料の一端を完成させたことで、地方大学の役割を果たしたと、理解して頂ければ幸いである。

緑の多い大学構内：五十嵐に大学が移転してきた時に、五十嵐砂漠とも言われ、緑が乏しかったが、各部局独自の植栽がなされ、変化に富んだ景観と共に、植物園の役割を果たすようになったので、多くの方々に植物に親しむよう願っている。



退官にあたって

理学部教授 池田 泰治

私が理学部に赴任してきたのは昭和38年9月でした。翌39年6月16日に起きた新潟地震のことは忘れることができません。1時15分（3限）から始まる細胞学実験の準備を終え、食事を済ませて実験の手順に頭を巡らせていた1時03分に、うなりのような音とともに猛烈な振動が始まりました。暫くの期間は学校の授業も中断されましたが、幸いけがもしなかったことで、今から考えると良い経験をしたと思っています。また、新潟大学の統合移転に端を発した学園紛争では、移転に前向きであった理学部は全

共闘の学生からは目の敵にされ、教職員、学生ともに大変な時期を過ごしました。

学生時代から自分のテーマとしていた電子顕微鏡による葉緑体の構造解析、および植物の生長などに伴う葉緑体の構造変化の追跡を、電顕観察、電顕オートラジオグラフィ、フリーズ・フラクチュア法、蛍光抗体法など手段は変わりましたが、最後まで葉緑体に主眼をおいた仕事をすることができました。赴任してきた当時は理学部にはまだ電子顕微鏡がなく、4年間程、医学部の中央電子顕微鏡室に通って使わせて頂きながら仕事に没頭していたことを懐かしく思い出します。当時の学生諸君は今に比べて金銭的に苦しい生活をしていただいた人が多かったのですが、自分から積極的にテーマを求めて勉学にいそしんでいました。今、彼らは全国の大学、研究所、高校などで指導的役割を担っています。

これからの社会は益々厳しくなると思いますが、学生諸君には個性ある人材として積極的に自分の道を切り開いて行ってほしいと願っています。



Feature



思い出すことなど

理学部助教授 高橋 利保

1962年5月私の大学生活は始まった。着任すると、先輩として斎藤先生、矢野先生がおられ、観測員として滝本さん、清水さんがおられた。丁度IGY（国際地球観測年）の期間で、仕事は弥彦山頂での夜光観測であった。毎月新月の前後2週間は観測員と一緒に山頂に泊まり込んでの観測であった。1967年に観測施設が新潟大学大気光観測所となると同時に私の研究室出身の木山先生が着任され、光電観測を担当、私は分光写真機による観測を担当することになった。分光写真機を使う、これは恩師彦坂先生の学説である中緯度超高層大気への低エネルギープロトン流入を実証するという使命感からでもあった。それは夜光スペクトル中に $N_2^+ 3914 \text{ \AA}$ バンドを検出することであった。そのために人工光の少ない蔵王山麓に分光器を運び特別観測を行ったりした。この経験により1989年10月21日の夜理学部屋上で斎藤教授とともに低緯度オーロラの観測に成功し国際学会で発表することができたのは幸福な思い出である。1972年教養部に異動していたがここでは大学紛争の末期に学生部協議会委員として清水教養部長や学生部の方々と苦労を共にし紛争解決の一翼を担ったのも大切な思い出である。

夜光観測を通じて夜の空を見ながら超高層大気の研究をし学生を育ててきました。今後は新潟大学の発展を静かに見守りたいと思っています。



超高層大学科学ゼミを一休みして

新潟大学を退官するにあたって

医学部教授 岩淵 眞

私は昭和36年、外科医になるために第一外科学教室の門を叩いた。10年後、当時教授の堺先生が胃癌で急逝され、武藤講師が後任の教授になられたことで私は一般成人外科から離れ小児外科に専従することとなった。そして10年後、医学部付属病院に小児外科診療科が新設されることになり、私が担当することとなった。スタッフは教授1名と第一外科から拝借した助手1名での船出であった。しかし、幸いなことに第一外科学教室で小児外科をやってきた仲間と一緒にこの小さな船に乗りこんでくれた。進む径は細く急で、時々、立ち止まり息を整え前進した。そして更に10年後、講座の誕生を迎え、今回、外科の修練を開始してから40年目に退官することとなった。



私の40年間の外科医、小児外科医としての人生は多くの友人や先輩、後輩との素晴らしい出会いの中で育まれ、実を結んだもので心より感謝している。特に、外科学教室で前学長の武藤輝一先生にお会いしなければ現在の私の人生はなかったし、先生は公私ともに私の大恩人と思っている。

学生諸君も学生時代を通し、多くの人々との出会いを大切にしてほしい。新潟大学には素晴らしい教官が居られるし、友人の中に一生、胸襟を開いて語ることの出来る仲間がいることと思う。豊かな人生、感動多き人生、心休まる人生は善き人に巡り会えるかどうかで大きく影響されると思っている。

そして人生の終着地は若い頃考え、夢見ている目的地とはかなり違った所にあるとも思われる。まずは、“今”と言う時を大切に生きること、そして10年先に目標をおき、それに向かって努力するのが良いのではなかろうか。学生諸君には将来、新潟大学で学べて良かったと言える学生生活を送ってほしいと心より願っている。

若い皆さんの勇気に期待

医学部教授 下地 恒毅

本学に赴任してから26年半余があとと言う間に過ぎてしまいましたが、やり残しの仕事が残っています。少年老易学成難。雑用に追われ、学生との交流が少なくなって参りましたが、学生講義等を通して最近気になっていることを二つ。

まず一つには、授業態度。講師は一生懸命準備をしてきているのですから、たとえその内容が退屈であろうと、敬意を表すのが学生としての務めです。私語等で周囲に迷惑を掛ける者が居れば、勇気を出して戒めようではありませんか。面白くない講義でも必ず何か得るものがあるものです。私の学生時代の経験から、出席した講義の内容はともかく、講師の人間性に触れ得たことが、書物では得られない貴重な教訓として多く残っております。

次に、質問する学生が少なくなって来ていること。これでは講義する方も張り合いがありません。講義はレシプロカルな会話があって始めて生の講義の意義があります。

これら二つの事柄自体は大したことでないかも知れませんが、私はその背景にある心の問題が気がかりです。

最後に、本学にも多くの外国人留学生在が勉学にきていると思いますが、彼等と親しく付き合って広く教訓を学び取って下さい。世界は今いろいろな面で激動の中にあることは確かです。その中にあって、自らを見失わず、良識の下に、物事に迎合することなく勇気を持って言動に移して下さい。若さはほとばしる勇気と力の泉です。皆さん、さようなら。



Feature

お世話になった34年間

歯学部教授 小澤 英浩

昭和36年新潟大学医学部第三解剖学講座へ赴任し、一時母校の東京医科歯科大学に戻りましたが、昭和42年、新設の新潟大学歯学部へ再度赴任して以来今日まで、新潟大学に勤務しておよそ34年になります。その間、荒川学長はじめ多くの素晴らしい友人と出会い、その出会いが今日まで私を支えてくれました。

歯学部創設時はプレハブ校舎、間借り校舎で、新校舎へ移転するまでは多難でしたが、その新校舎もすでに老朽化し、旭町地区再開発整備計画の中で改修や新築の検討が進められる時期になってしまいました。

大学を卒業後直ちに飛び込んだ電子顕微鏡による極微の世界は、何ものにも代え難いほどのロマン溢れる世界であり、私を今日まで魅了し続けてきました。昭和48年以降主宰してきた私の研究室では、主として歯や骨など硬組織の超微細形態と機能に関する研究を行ってきましたが、幸いなことに、忍耐強く優れた研究者が大勢集まり、世界一の硬組織微細形態学を目指し、常に新潟大学から質の高い研究成果を世界に発信続けよう！という私の願いを叶えてくれました。一方、新潟大学には、医学部整形外科学講座とともに立ち上げた「新潟カルシウム代謝硬組織研究会」、さらに広く新潟大学の、自然研や理・工・農などの硬組織研究者を交えた「新潟オステオサイエンスグループ」が活動するようになり、現在この研究の輪を近在の大学・研究所まで広げた「新潟硬組織研究トライアングル」としてより幅広い活動が展開され始めています。今年の9月にはこの研究グループを中心に第8回バイオミネラリゼーション国際シンポジウム(BIOM2001)を新潟で開催する予定になっております。



昨年10月に開催した、国際バイオミネラリゼーションのプレシンポジウムでの写真です。

希望を持って夢を追い続けて来た、新潟大学での34年間の生活は、充実しており恵まれていました。

最後に学生諸君をはじめ、若い研究者に「幸運によって予期せぬ発見をする能力」serendipityという言葉を送りたいと思います。この幸運を手にするためには豊かな感性が必要であり、それはまさに「個性輝く大学」を創造するために今まさに求められているものでもあります。

退官を目前にした今、王昌齡の「洛陽親友如相問 一片冰心在玉壺」の心境に到達出来ればと願っております。長い間本当にありがとうございました。

医療技術短期大学部とともに

医学部教授 重野 直也

私は新潟市学校町で生れ育ち、医学部で学び、そのまま医学部に職を得て今日に至りました。この間、旭町キャンパスから一歩も離れることなく過しました。子どものころ、西大畑のグラウンドは格好の遊び場でしたから、その時期から数えると、何年お世話になったのでしょうか。

昭和49年（1974）に医療技術短期大学部が設置されると同時に医学部から移りました。それ以前から、コメディカルは4年制大学で養成しなければならないという強い希望はありました。しかし、これは新潟大学だけで実現できないことは、私にもすぐわかりました。そして、いくつかの国立大学に先を越されながら、ようやく1999年10月に保健学科が誕生した次第です。これには、歴代部長の意を継いだ櫻井部長（現保健学科長）を中心に、実に多くの人の努力が必要でした。呼びかけに応じて就任された教員の英断にも感謝しなければなりません。

短大での学生との出会いはすばらしいものでした。多くの職員の皆さんとは納得できる仕事をさせていただきました。お礼の言葉もありません。このような職員がおられる限り、独立法人となっても、幾多の困難を乗り越えていけることと信じて疑いません。

新潟大学の前途に期待を込め、保健学科の充実と発展を願い、保健学科の学生たちの健闘を祈ります。



良き友人・知人に恵まれて

医学部教授 櫻井 浩治

終戦後の混乱した教育を受けた私は、高校を卒業する頃には、教育者が報道関係の仕事につきたいと思っていた。それがいざ文系に籍を置いてみると、自分の人生が見えず、結局、幼な馴染みや高校の仲間が入っていた新潟大学医学部へ再入学した。

そして卒業後は、病人を心ある者として総括的に診るという心身医学に興味を持ち、慶応義塾大学の精神神経科学教室に5年間過ごしたのだが、今度は個人的な理由から、新潟大学の精神科に勉強の場を移した。それから保健管理センター、医療技術短期大学部、医学部保健学科と勤務内容は変わったが、結局は32年間、新潟大学にお世話になった。



定年を迎えるに当たり、このような人生の歩みを振り返ると、ただ流れるままに身を任せていて、いつまでたってもモラトリアム人間の域を出ていない自分の姿が見えてくる。けれども、ともかくもここまでたどり着いたのは、私が本当に良い友人、知人に恵まれていた故だと思う。だからこそ、流れに身を任せて自分なりの人生が送れたのだ。

私は、同じ精神科医である同僚から信頼される臨床医でありたいと願ってきた。が、これとても、己一人でなれるものではない。

もし私の新潟大学での足跡を、と言われれば、学生時代に現行の医学部学友会規則を創ったことと、短期大学部の保健学科への移行措置に関わったことであろう。

これらのことも、素晴らしい先輩、同僚、後輩、知人に恵まれて成し得たことであったと、今更ながら自分の運の良さを感じるのである。

Feature



最後のコーヒーの味

医学部教授 眞壁 伍郎

「君、時間と金がないことを、学問ができないことの理由にしちゃだめだよ。」学生のころ、ルターの勉強がしなくて独文に入ったわたしに、歴史の〇先生があるとき真顔でこう言われました。この言葉は、いまでも耳の底に残っています。あの文献がない、この文献がないと嘆き、そしてほとんど肉体労働並みの授業時間をこなしていかなければならない語学教師。大学には、どうも知的労働で生きている人と、肉体労働で生きている人がいるのではないかと思ったことがしばしばでした。

しかし、振り返ってみて、やはり〇先生の言葉は当たっています。ほんとうに学問に励んでいる内外のすぐれた研究者にお会いすると、どの人も時間と金を切り詰めながら学問に精を出しておられます。「ゆっくり急げ」(festina lente)、と「多くよりも、深く」(non multa, sed multum)を文字どおり、20年、30年の長さにわたってご自分の生活としておられるのです。どうか新潟大学も、ますます学問の場にふさわしく成長していったらいいと思います。学年の最後の授業が終わったとき、いつか〇先生はわたしを喫茶店に誘って下さいました。そして、「ぼくはこの時がいちばん好きなんだ」と、コーヒーを飲みながら、学問の話を楽しそうにしてくださいました。わたしにもいよいよ、最後のそんな時が訪れたようです。よい学生や同僚たちに恵まれ、とても幸せでした。そして、いつも裏方となってご尽力くださった事務官の方々にも、心からの感謝を申しあげたいと思います。



新潟大学の思い出

工学部教授 稲垣 眞

学校を卒業して民間会社に就職し、暫く在籍した後、新潟大学に奉職し、今年停年退官を迎えることになった。長岡に12年ほど、新潟に22年、合計34年ほど新潟大学にお世話になったことになる。その間の思い出を幾つか述べることにする。



工学部に赴任したとき大学は長岡にあった。大学の近くに悠久山公園があり、学生と一緒にいった花見などが記憶に残る。新潟に移転してからの思い出と言えば、自然科学研究科の設立があげられる。会議において当時の学部長からその経緯を聞き、ああ、やっと博士課程が出来るのか、と感慨にふけったのを思い出す。博士課程が出来た後直ぐ工学部の改組が行われ、新しい学科になったのも忘れられない出来事であった。

長岡にいた頃大学紛争があり、民間会社と共同研究をしていた人は肩身の狭い思いをしていたように思う。現在は、地域共同研究センターも出来、積極的に共同研究を進められる時代になり、その考え方の変化は今昔の感じがする。

大学がエイジェンシー化される、と言うことで将来の新潟大学の姿をはっきりと捉えることは出来ないが、地域の人たちに愛されるユニークな大学になって欲しいものだ。

最後に、新潟大学でお世話になった多くの方たちに、お礼を申し上げて筆をおくことにする。

新潟大学を去るに当たって

工学部教授 飯田 高三

34年余の企業生活から大学へ移り、5年半があつという間に過ぎて退職する時がきた。企業で厳しい研究開発に携わる期間が長かったためか大学へ来た当初は、この世にまだこのようなところがあつたのかと驚いたものであつた。何事も過去が規範となり、個人の自由が大きく規範がないに等しい点が最も印象に残っている。企業で研究開発に携わる管理職ほど身分の不安定なところはなかったから、公務員としての安定な身分には気の休まる思いをしたのも思い出となった。実社会へ出る学生に役立つ教育と本大学を少しでも世間に知らしめる事を私の大学における課題と認識して努力したつもりであるが、ここへきて反省する事も多い。夢中で行動した時から教育の難しさを感じだした所である。

社会との接点を太くするべく大学は変革を求められ動き出しているが、何よりも大学人の意識の変革が第一と思われる。過去は踏襲するためにあるのではなく未来への指針であり、組織として大学が存続するためには規律のある自由を謳歌することが必要である。

私は社会での体験から技術者・研究者として重要な素質は、「勇気」、「忍耐力」、「世界に通じる技術」と考えており、新潟大学の学生は日本海側の厳しい気候で培われた忍耐力を恵みと感じて立派な社会人に成長してもらいたい。また、大学人は今日の世情の荒廃をみるとき如何に教育が重要であるかを感じて熱意をもって学生と接して頂きたい。新潟大学の今後の発展はひとえに皆の努力にかかっているものであり、それを期待したい。



Feature

Life is Challenge

脳研究所教授 熊西 敏郎

私の好きなことばに[Life is Challenge]という格言がある。格言といってもこれは私が考え出した言葉なので知ってる人はいない。和訳すると「人生は挑戦である」となる。この挑戦ということばの意味は、だれかに戦いを挑むとかだれかと競争するということではなくて、自分自身の能力の限界に挑戦すること、と訳するのが正しい。すなわち、人生とは自分自身の能力の限界に挑戦することである、という意味になる。

私は信大を卒業後、東大の伝研（現医科研）の大学院でがんの研究を開始し、新潟に来てからは主に脳腫瘍の研究に取り組んできた。



医学部学生とともに

この過程で数多くのすばらしい人々との出会いがあつた。この出会いの中で私は一つのこと気がついた。それは優秀な人ほど大変な努力をしているという事実である。優秀な人ほど自分自身の能力の限界に挑戦しているということ気がついた。私は私の格言がますます好きになった。

新潟は脳腫瘍研究の発祥地である。戦時中の1942年にすでに中田瑞穂、赤崎兼義らにより脳原発リンパ腫の論文が発表されている。その後の研究も伝統的に輝かしいものであつた。私の脳腫瘍学がこの伝統に恥じないものであつたかどうかは心もとない限りであるが、Life is Challengeの気持ちだけは持ち続けて取り組んできたつもりである。

この春、私は新潟大学を卒業することになる。これを機会に私の好きな[Life is Challenge]ということばを新入生の諸君、学生諸君、卒業生諸君に贈りたい。そして私自身にも改めて贈りたいと考えている。

さまよい続けた 34 年

農学部教授 屋代 眞

私は数年前にたまたま広報委員を仰せつかり、本欄を始め種々の原稿を先生方をお願いしてきた立場上、本稿の執筆を辞退できなくなってしまいました。

私は66年に農学部に着任し、林学科と応用生物化学科の一員として約34年間本学に勤務させていただきました。その間最も印象に残っているのは、当時全国に吹き荒れ、本学を巻き込んだ大学紛争の嵐であります。これを契機として、ある程度の改革が行われたことは事実ですが、残念ながらことには、今でも脳裏に焼き付いているのは、紛争解決に対する無力感です。しかし、一つだけ付け加えておきたいと思います。当時の指導的な立場にあった方々の本学再建のために注がれた大きなエネルギーと熱意に対して、心から感謝と敬意の念を捧げたいと思います。

時が移り、今また学長のもとで21世紀に相応しい大学を目指して全学が一体となり新たな改革がすすめられております。成功を切にお祈りいたします。さて、私はこれ迄、途方もなく長い道のりをやっとの思いで終点まで辿り着くことができました。周囲の多くの方々に助けられて。

最後に学生諸君に一つだけ言い残したいと思います。現代は、20年前に比べて進歩や変化の速度が加速度的に速くなり、そのため、「学歴社会」は過去のものとなり、「実力社会」に変わっております。社会に出てから絶えず自己研鑽を続けないと取り残されてしまうでしょう。それはどんな立派なdata baseでも、2,3年updateを怠るとobsolete化しほとんど使われなくなってしまうように。



21 世紀のはじめに思う

農学部教授 村畠 由直

昨年末、朝日新聞にノーベル賞受賞者白川教授を囲んだ座談会の内容が掲載された。その中で、高名な高分子学分野の対談者のひとり、将来の夢として「もし人間の背の高さが半分になると、体重は四分の一ぐらいになる。エネルギー、食糧など、すべてが解決できるんじゃないかと思っています」と述べている。これは今、深刻になりつつある環境、資源問題にかかわって発言されたものであろうが、科学の進歩はこの手前まできているのだろうか。

地球環境問題を人間改造によって解決することが夢だというのが、このようにしてまで人類は生存を求めなければならぬのか。20世紀、人類は科学の使い道を誤り、原子爆弾を生んだ。新しい世紀、人間としての倫理は科学の暴走をくい止めることができるか。人間とは何か、が問われている。



チェコ・ポーランド国境に立つ（ブラック・トライアングルといわれる周辺は1990年前後の酸性雨で森林はほぼ壊滅。2000年6月科研調査）

科学の進歩はこうにして著しい。しかし私たちが住むこの地球は病んでいる。グローバル企業に主導された大量生産、大量消費、大量廃棄を踏まえた20世紀文明をどのように克服するか、研究者の前にはおきな課題が横たわっている。

今、30余年に及ぶ国立大学での生活に終止符を打つ。この間、五つの大学でお世話になり、新潟では2か年間、有意義な生活を過ごさせていただいた。若い学生諸君、もうれつに勉強して下さい。そして、世紀を切り開いて下さい。わたくしもまた、残された機会を、地球環境問題の解決に向け教育に当たっていく予定である。

Feature



既成概念からの脱却を！

農学部教授 阿部 學

スイスアルプスを仰ぎ見る湖畔の砂浜にはさざ波が押し寄せ、何を語るか老若男女のカップルが雄大なパノラマを楽しみながら散策していた。その時、行く手に忽然と巨大なコンクリート護岸が出現した。散策路は老夫婦をその天端へといざなった。護岸上の老夫婦は、湖面への転落を恐れて一列になり、アルプスを仰ぎ見るどころの騒ぎではなくなった。やがて100mほどの護岸は終わり心とらぐ砂浜に降り立つと、老夫婦は再び手をつないだ。

この無粋な護岸は、波浪から人命、財産を守るために築造されたが、ある時、村長がその必要性に疑問を持ち、取り払ってしまった。その後、災害は発生せず、結局、護岸は取り越し苦労の賜と証明された。護岸の遺物は村長の小粋な計らいで散らばって残されていると聞いた。いま欧州各国では、河川湖沼のコンクリート護岸を反省し、近自然工法を用いての自然復帰に努めている。

欧州視察を終えた建設省幹部は、いま、わが国でコンクリート注入の公共事業を止めたら、経済は大きく破綻すると豪語した。経済政策の貧困を見る思いで100年、150年に一度の災害を想定した公共事業を横目で眺めている。

強力な接着剤の開発はやがて、剥離剤の開発へと変転した。土木工学分野では、コンクリートを流し込む人材から、やがてそれを撤去し、自然を回復する人材が求められるであろう。独法化に向けて、学際的視野を持った人材の登用と発想の転換を望んで止まない。



佐渡の実習にて

① 就職シーズスタート

いまや2002年4月入社に向けての就職運動が始まっている。就職協定が最早存在せず、就職情報会社がいくら学生を煽っても、学生は2月の学年末試験を終わらせなければ、就職運動に本格的に取り組むことはできない。学年末試験そっちのけで就職運動にのめりこむ学生などは、企業は相手にすべきではないだろう。どうせ彼らは来年の卒業はほぼ駄目と考えて良いからである。したがって本格的な就職シーズンは、学年末試験が終わる2月下旬から始まるというべきである。

しかし、ここ数年の就職シーズンには、熱気のようなものが感じられない。これは学生だけでなく、企業も、一部の例外を除けば同様で、確固たる採用政策を持たず、単にスケジュールを消化しているだけのように見える。

② なぜ学生の熱気が感じられないか

学生の熱気のなさの原因は、少子化または一人っ子主義からくる両親の子供への過剰な圧力が、学生達の自主性と社会性を喪失させていることによるものと思われる。親の子供に対する圧力とは、就職選択における安定性を子供に異常なほどに求めていることであろう。このために子供（学生）には、就職選択力はなく、もっぱら④

就職部

公務員が第一志望となる。彼らにとっては国家・地方公務員試験のための試験勉強が就職戦線であり、それ以外の選択肢はほとんどない。このことは、子供（学生）から、人と向き合う覇気を奪っていることに親たちは気付くべきである。

しかし、学生が民間会社にまったく興味がないというわけでもなさそうである。就職部にはコンピュータが就職活動をする学生のために備えてあり、この利用率は日増しに高くなっている。個人でコンピュータを持っている学生も少なくないだろう。彼らはインターネットを通じて、興味ある会社のホームページを呼び出し、そこに搭載されているエントリーシートに必要な事項を書き込んで、会社に応募する手続きをする。30社にエントリーシートを出したなどという努力家(?)もいる。しかし多くの学生の就職運動はここまでである。積極的にOBを訪ねて、志望する会社の仕事の中身、将来展望などを質問して、その会社にチャレンジする動機付けを行う努力はしない。エントリーシートの返事がくるのを待っている。結局30社にエントリーシートを出した努力は無駄骨だということに気付くが、その後は公務員試験の期日を待っている。

そもそも30社にエントリーシートを出すなどとい④

病人達の就職戦線

就職部長 小島 康裕(法学部教授)

う行為が、勝算のある就職運動に結びつくはずはない。エントリーシートをどんどん出せというのは、就職情報誌の宣伝に載せられているだけのことで、まともな就職運動とはいえない。一人が30社にエントリーシートを出したら、いわゆる一流会社には何万通のエントリーシートが届くだろうか。そんなものを全部読むほどの人員は、如何なる会社でも人事部には配置されていない。ほとんどの学生が、紙くずをセッセと書いているのである。ここに最近の学生の精神的傾向が現れているであろう。彼らは機械に接することは出来るが、人と向き合うことが苦手になってきているのである。エントリーシートは5枚でよい。それを出すまでにできるだけ情報を集めてそれを分析し、2月末には、学生の方からチャレンジすべき企業を選択し終えていなければならない。これが就職戦線における勝ち方である。

③ 企業の長期不況シンドローム

企業側の元気のなさには、呆れるばかりである。概して企業の採用活動は萎縮しているように思われる。就職協定もないし、学生も学年末試験が終わっているいまこそ、人事の採用チームが大学のキャンパスを歩き回っていても良さそうなものであるが、それらしい人影は見あたらない。これはおそらく多くの企業が採用経費を大幅に削減しているためである。長期不況に対応し、競争力を回復するためには企業がリストラを行うことは、④

やむを得ないことであろう。しかし企業の将来を担う若い人材を発掘するための予算を減らすような企業には、明日はないのではなからうか。しかも不況とリストラにより新卒の採用員数は、全体として減少している。したがって優秀な学生でも就職運動は、バブルの頃よりは厳しい。だからこそ大学には、就職の内定をなかなかもらえない優秀な学生が大勢いる宝の山がある。この状況は企業にとっては人材確保の絶好のチャンスのはずである。ところが企業とくに大手企業は、採用担当者の出張旅費、新幹線の運賃とホテル代などをケチって、地方の国立大学から人材を発掘するための人を派遣しない。そのために学生の就職運動のための経済的負担は、巨額になっている。これが日本の企業であり、世界中から人材を集めようとしてスカウトを世界に配置するアメリカの企業とは天と地ほどの差がある。

要するにこの数年の就職戦線は、学生も企業もまったく元気がない。特に企業は重症のようだ。これをわたくしは長期不況シンドローム(症候群)と名付けている。特に企業は、自分がそういう病人ではないかどうかすぐに自己点検し、活発な人材発掘を日本全国で行うように姿勢を正してもらいたい。親の圧力に屈して元気がない学生も、企業から刺激を受ければ重圧を跳ね返す若さは持っていると思う。新潟大学就職部は、活発な企業をパートナーに持ちたい。

『首のリンパ節が腫れたときには』

保健管理センター助教授
青木 定夫保 健管理センターの
内科の健康相談に訪
れる学生の中には首のリン
パ腺が腫れていますとい

う訴えの人が少なからずあります。リンパ腺という言葉は、古い解剖学の名残で、何かを分泌する組織に類似していたので、『腺』という言葉が使われていましたが、今では分泌組織ではないのでリンパ『節』と呼ばれています。ちなみに扁桃も扁桃腺ではなくただの扁桃です。

首のリンパ節の腫れは、扁桃と同じく、風邪や細菌感染などで起こります。このような場合は、急性炎症に伴ってその防御のために腫れるので、自発痛や圧痛（押すと痛いこと）があるのが普通です。

ところが、昨年の暮れ頃から、風邪をひいて首のリンパ節が腫れていると思っていたのに、数日経ってもなかなか良くならないという患者さんが目立ってきました。リンパ節の腫れだけでなく、体がだるくて仕方がない、38℃以上の熱が何日も続く、食欲がないなど、結構重い症状もあります。リンパ節も、首の両側に広い範囲に腫れていて、時には鎖骨の上にもしこりを触れます。圧痛はそれほどでもありません。

このような場合は、**伝染性単核症**という特殊なウイルス感染症が疑われます。この病気に流行があるのかどうかははっきりした報告がないのですが、最近新潟市周辺の病院、大学にもかなり患者さんが見られます。この病気は、**EB(Epstein-Barr)ウイルス**が原因でおこります。これまでの報告では、日本人の90～95%の人が、子供のころにごく軽い風邪症状かあるいはまったく無症状のうちに（不顕性感染といいます）このウイルスに感染して免疫ができていとされています。しかし、EBウイルスは免疫が成立した個体（既感染者といいます）でも、体内のどこかに潜み、時々どこの粘膜に出てきます。最近の調査では、大学に入るまでに感染している人の割合は80%程度と低くなっている事がわかってきました。EBウイルスに未感染の人が、既感染者と接触すると、のどのEBウイルスをうつされて感染し伝染性単核症を発症するのです。単核症という言葉は、血液中に大きな核を持ったリンパ球が増えてくることに由来しています。ときには白血球と間違えられることもあるようです。EBウイルスの初感染の症状は、年齢が高いほど重くなります。感染は唾液などの**飛沫感染**によって起こりますので、顔

を近づけて話す、飲み物を回し飲みする、キスをするといったことでうつります。Kissing diseaseという別名があるくらいです。具体的に

身に覚えがなくても（？）満員電車やバーゲンなど人ごみでうつることがあると考えられています。

感染の機会があってから発症までは、4～8週間程度です。**発熱、リンパ節腫脹、咽頭痛**が主症状ですが、比較的重い

肝障害（急性肝炎様）が10%程度に見られます。4～8週間で大多数の人は自然に軽快しますので、治療は対症的のみです。肝障害や他の症状が重い人では入院が必要になります。ごく一部の人では、EBウイルスにたいする免疫応答がうまくいかなくて、重症化したリ遷延化したり、さらに重い病気に進行したりすることが知られていますので治り難い場合には注意が必要です。最初にきちんと診断することが重要ですから、長引くリンパ節腫脹があったら医療機関を受診してください。EBウイルスの検査は血液で簡単にできますので、確定診断はそう難しくありません。またこの病気になる、ペニシリン系の抗生物質にアレルギー反応（多くの場合は皮膚の発疹です）を起こすので、リンパ節や扁桃の腫れがあっても、安易に抗生物質を服用するのは好ましくありません。

悪性リンパ腫に代表される腫瘍性のリンパ節腫大では痛みがないのが普通です。悪性リンパ腫は若い人にも見られますが、内科的治療法が進歩しており多くの場合治療も可能です。いずれにせよリンパ節の腫れが気になる人は一度センターに相談においでください。

保険管理センター【五十嵐地区】

（本部庁舎西隣）

Tel.025-262-6243 Fax.025-262-7517

旭町分室【旭町地区】

（旧看護学生寄宿舎2階）

Tel.025-227-2040 Fax.025-227-0748

利用時間／8:30～17:00（土・日曜、休日は除く）

「探査技術によって地下を見る」

講師：農林水産省農業工学研究所部長 竹内 睦雄博士

平成12年12月22日（金）、14時30分から1時間半にわたり、農林水産省農業工学研究所部長・竹内睦雄博士を講師として迎え、農学部C198教室において全学講義を開催した。博士は、物理探査技術開発分野におけるわが国の指導的研究者であり、氏が開発した土木分野における探査技術、ダイポール・ダイポール法によって、平成6年度の科学技術長官賞（研究功労者）を受賞された。

今回の講義では、地下探査技術の特性や応用についてお話しいただいた。基礎的研究成果を従来と異なる分野に適用することによって、新たな技術開発に繋がる多くの事例が示された。基礎研究と社会との繋がりが具体的、平易に説明されたため、講義室は席を確保できない人が出る状態であったが、快い緊張に満たされた。

講義「探査技術によって地下を見る」の概略は以下のようであった。

1. ダイポール・ダイポール法

物理探査技術は、元々は資源探査に用いられ、高い精度を獲得してきたが、土木分野ではこれとは比べ物にならない低い精度でしか技術適用が行われてこなかった。地球物理を専門として資源探査技術の開発研究に携わっていたが、農業工学研究所でこれを土木分野に適用する機会を得た。ダイポール・ダイポール法は、従来の探査技術に比べて飛躍的に高い精度をもつが、農業土木技術者との共同作業の中で、多様な可能性を示した。

2. 公共事業と探査技術

物理探査法は、土壌や構造物を掘り起こしたりしない、非破壊の状態で観測できるため、事業費節減に役立つほか、破壊が許されない物の状態も把握できる利点をもつ。

物理探査法には、電気探査比抵抗法、比抵抗トモグラフィ法（ダイポール・ダイポール法）など多様な技術がある。近年では、極浅い地下の状況を探査する地下レーダ技術の応用も進んでいる。

3. 探査技術適用範囲の広がり

ダイポール・ダイポール法による電気探査は、農業分野では①地滑り地帯の地層の三次元解析、②ダム漏水場所の診断、③地下の旧河道調査など多様な対象に適用された。

また、農業以外の分野では、会津磐梯山の縦断面観測に適用し、地下マグマの挙動予知を可能にした。山塊の生成や崩壊の履歴を視覚的に示すことができるなど、他の手法にはない特性が注目された。地下レーダ技術は農地の土壌調査はもとより地下埋蔵文化財の探査などにも用いられている。

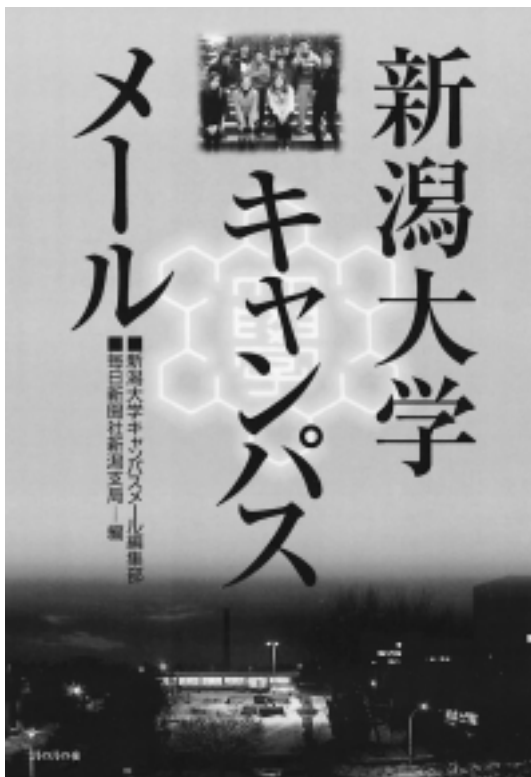
4. 経験と技術

物理探査の効果は、調査計画の善し悪し、技術の組み合わせに左右される。不十分な計画や技術選択では調査に失敗するため、慎重を期することになる。会津磐梯山の縦断面調査の観測線設定では、山を登りながら電極を埋設し、電線を敷設するのは楽しくきつい労働であった。

探査結果はモニターに魚群探知機のような情報として示されるが、これらは多様な要素を含む。このため、読み解く作業が必要だが、経験を積むことによって、初めて適切な判断ができることなど人間的な側面も大きい。地盤の調査技術は近年飛躍的に発達したが、こうした技術を如何に組み合わせて効果的に活用するかは、利用する側の課題である。

（文責：農学部教授 有田 博之）





『新潟大学キャンパスメール』 発刊！

私たち「Campus Mail」編集部では、新大、大学生を取り巻く様々な話題についての記事を毎日新聞新潟版に毎週土曜日、掲載してきました。

1999年10月に始まったこの連載も今年2月で終了しました。この機会に、これまでの記事を1冊の本にまとめることになりました。

この本には連載「Campus Mail」に加え、新大の歴史、各学部長による学部紹介、OB・OGからのメッセージなどが掲載されています。昨年8月までに併載してきた、新大の留学生や外国人教師に新潟観・日本観を語ってもらった「ニイガタ探見」の記事も、すべて掲載します。

OB・OGからのメッセージには、弁護士で元・東京高検検事長の村山弘義さん（人文学部卒）、社員教育コンサルタントで（株）WIT代表取締役の瀬賀孝子さん（同）、新潟国際情報大学学長で前・新大の武藤輝一さん（大学院医学研究科修了）、新潟県議会議員で前・NVC新潟国際ボランティアセンター事務局長の西村智奈美さん（大学院法学研究科修了）のインタビューが収録されています。

これまで、「模索する」大学・学生の姿を「模索する」学生自身の手で描きたいと考え、続けてきました。新大に関係のある方にも、ない方にも、できるだけ広く読んでいただければ幸いです。

本は毎日新聞新潟支局の助言・協力を得つつ、「Campus Mail」編集部の自費出版によって出版されます。

出版は2月20日です。1,400円（税込・送料別）とさせていただきます。

購入希望、問い合わせなどは下記連絡先へどうぞ。

連絡先：毎日新聞新潟支局 Tel 025-222-1515 / Fax 025-222-1517

サークル N 写真展

「NIIGATA PHOTO SESSION 2001」

■日時 2001年3月17日から20日 午前10時から午後5時（最終日は午後4時まで）

■場所 万代リターナ（万代シティバスセンター2階）

■企画の趣旨

新潟大学の写真部とサークル「ギャラリー」の卒業生が中心となり、写真がきっかけとなって知り合った友人・知人を巻き込んだ卒業イベントです。参加者は県内大学・専門学校の学生から社会人と幅広く、撮る被写体や写真とのつき合い方も様々な人々が集まります。

私たちは今まで所属する組織の枠の中で写真展を行ってきました。今回はそういった組織を、極端に言えば取り去って、写真という繋がりを持った人々とともに写真展を行おうと考えています。企画自体を参加者同士、そして来場者との出会いの場とし、今回がきっかけとなって新たな交流やグループが出来たらよいと

考えてます。

また、このような所属を越えすぎた大規模な写真展は、新潟では今回が初めてではないかと思います。雑多になると思うのですが、様々なパワーを持つ写真を皆様に見て、感じていただきたいと思います。

初めての試みでどんな写真展になるかわかりませんが、多くの皆様にご来場いただき、新潟の写真活動の発展のためにも多くの声を頂けたらと思います。

（写真部 谷内田 正志、丸山 千穂）



読んでる 聴いてる 売れている 10 生協売上 ベストテン

BOOKS

2001年1月

3位の「チーズはどこへ消えた？」
全米で2年間にわたってベストセラーとな
った話題の1冊です。100ページに満たない
物語の中に、読む人の人生を変える深い内容
がこめられています。

	書名	著者	出版社
1	今夜はパラシュート博物館へ	森 博 嗣	講談社ノベルス
2	バトルロワイヤル	高 見 広 春	太 田 出 版
3	チーズはどこへ消えた？	S.ジョンソン	扶 桑 社
4	金持ち父さん 貧乏父さん	R.キヨサキ他	筑 摩 書 房
5	話を聞かない男、地図が読めない女	ピ ー ス	主婦の友社
6	ビタミンF	重 松 清	新 潮 社
7	シドニー！	村 上 春 樹	文 藝 春 秋
8	ヒエログリフを書こう！	P.アーダ	翔 泳 社
9	ハリーポッターと賢者の石	J.K.ローリング	静 山 社
10	対談の七人	爆笑問題	新 潮 社

(新潟大学生協書籍部調べ)

CD ALBUM

2001年1月

1月はベストが半分をしめました。目立つ
のは浜省やサザンなどのベテラン勢のベスト
です。浜省は初のベストアルバムと言うこと
で注目度が高くなりました。特筆すべきはビ
ートルズでしょう。去年11月の発売とともに
世界のチャート1位をしめたザ・ビートルズ1
が未だにランクインしています。オリジナル
で聞いていた世代と新たに聞き始めた世代を
も唸らせてしまう1枚です。今更ながら、ビ
ートルズはなんて偉大なバンドだったのかと
感じてしまいます。

	タイトル	アーティスト
1	DRIVE~GLAY complete BEST	G L A Y
2	バラッド3~the album of LOVE	サザンオールスターズ
3	ELEVEN	B 5
4	ザ・ビートルズ1	ビートルズ
5	D album	Kinki Kids
6	LOVE LIFE	h i t o m i
7	The History of Shogo Hamada "Since 1975"	浜田 省吾
8	MAX BEST	Various Artists
9	Souvenir~Mariya Takeuchi Live	竹内まりや
10	MINDTRAVEL	b i r d

(新潟大学生協購買部CDコーナー調べ)

PERSONAL COMPUTER

2001年1月

1月はデスクトップ型パソコンの利用が目
立ちました。Gateway社はインターネット上
で自分の使いたい仕様のパソコンをつくるこ
とができるので、人気があります。但しご注
文をいただいてから部材調達して組み立てる
ので、お渡しまでに時間がかかるのがたまに
きず。

SONYのVAIOシリーズは引き続き、人気
があります。APPLE社は新しいMACのシリ
ーズを発表しました。

	メーカー・タイプ	品 名
1	Gateway デスクトップ型	GPシリーズ
2	SONY ノート型	PCG-F70A/BP
3	Gateway ノート型	SOLO5300
4	Gateway デスクトップ型	Select シリーズ
5	NEC ノート型	PC-LC600J/54DR
6	Apple デスクトップ型	PowerMacG4 466
7	IBM ノート型	ThinkPad240Z
8	Gateway デスクトップ型	Performance シリーズ
9	Gateway デスクトップ型	Essential シリーズ
10	富士通 ノート型	FMVNE560R3

(新潟大学生協購買部パソコンコーナー調べ)



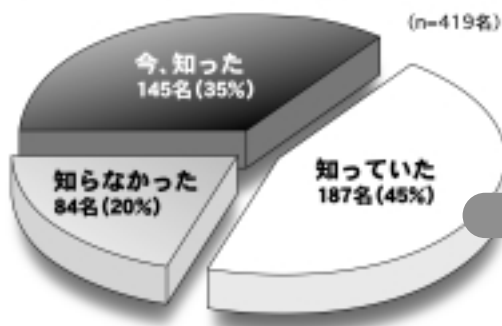
新大広報

昨年6月に「新大広報」に関するアンケートを行い、全学部の学生419名(男子219名, 女子192名, 無回答8名)から解答を頂きましたので, その一部を報告いたします。

Q1. 「新大広報」を知っていますか。

知っていると回答した学生が187名(45%)でした。

「新大広報」を知っていますか？



Q2. 「新大広報」をみて, 読んでどう思いますか。

「面白いときもある」と回答した学生が, 107名(20%), 「興味があるときもある」118名(22%)でした。

学生の皆さんが, 読んで頂いていることに編集者として心強いものを感じました。

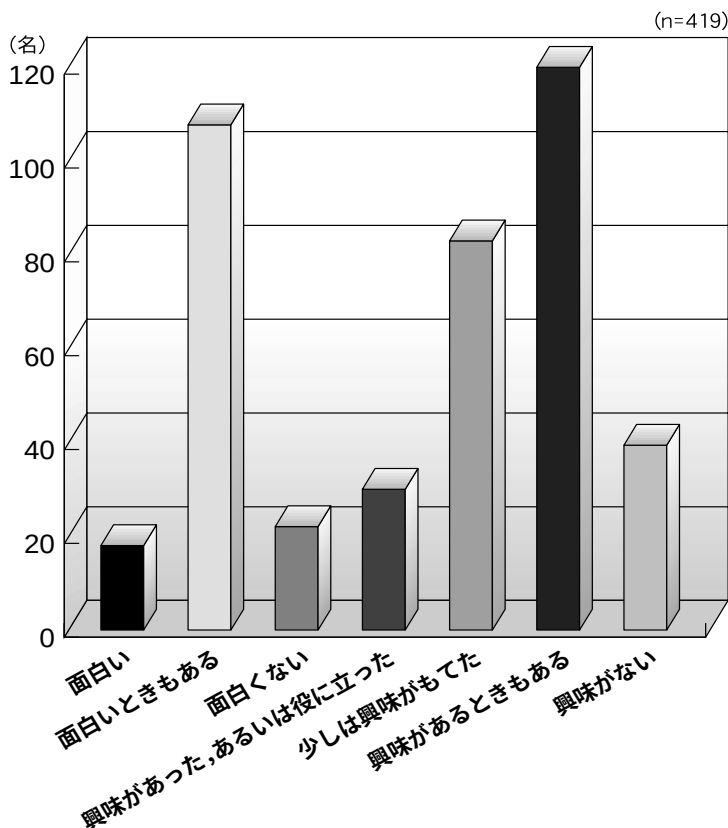
Q3. 取り上げて欲しい記事は。

資格・就職関係, 健康関係, 学生生活, 大学・学部の情報, 部活・サークル活動などで, 幅広い要望がありました。

今回のアンケートを今後の編集の貴重な資料とさせていただき, 今まで以上に愛読される「新大広報」を発行していきます。

アンケートに回答していただきました学生さんには, 心より感謝申し上げます。「新大広報」に関しますご意見・ご希望がありましたら, お気軽に編集者までご連絡ください。みなさんの生の声を待っています。

「新大広報」をみて, 読んでどう思いましたか(複数回答)



広報委員会 第一部会長 寺田員人
tel 227-2975
tera@dent.niigata-u.ac.jp

問い合わせ先
広報委員会第1部会(裏表紙に掲載)

「新大広報」に取り上げて欲しい記事(一部)

- 就職関係 —
資格, 先輩方のアドバイス, 就職活動の対策, 新大出身者の活躍, 新大生の就職先の傾向, 企業の本音(どんな人材が欲しいか) など
- 健康関係 —
健康法, 食生活, 生活習慣病, ダイエット・リバウンド, バランスのよい食事, たばこ, アルコールなど
- 学生生活 —
新潟市の紹介, 大学生生活・キャンパスライフ, 大学生の理想と現実, 学祭の予定, ホームステイした体験談など
- 大学・学部の情報 —
大学の現状, 新大の取り組み, 講義の取り方, 研究室紹介, 特色のある講義, いろいろな学部内での行事や出来事など。
- その他 —
部活・サークル活動の紹介, ボランティア情報, 新潟のイベント情報など

秋の紅葉と冬近くに実る植物

理学部教授 石澤 進

五十嵐構内で美しく紅葉する植物には、紅色に色づくナンキンハゼ、ニシキギ、モミジ類、黄色に色づくイチョウなどがある。ここでは、紅色に色づくツタと、秋に葉を落としても果実が枝から落ちないナナカマドとツルウメモドキの3種を取上げて紹介する。

ツルウメモドキ (ニシキギ科)

つる性の植物であるがそれほど長いつるにはならない。葉を落としても果実がつるに残り、生け花によく使われている。自然でも1月にまだ実を残していることもある。6月ごろ小さい目立たない薄黄色の花が開く。それに比較して果実は外側に黄色の皮があり、内側から紅い衣(種衣)をかぶった種子が現れ、黄色と紅色とのバランスが面白い。花の少ない時期に目立ち、枝の折り曲げの自由がきくことから、生け花としてよく使われる由縁であろう。構内に果実を着けるまで大きくなった個体はそれほど多くないが、方々に生育する。雌雄異株であるので、大きく育っても実を着けない株もある。



ツルウメモドキ(1999.11.17撮影)
第二食堂裏

ナナカマド (バラ科)

葉を落としたあと、寒風の吹き抜ける寒々とした季節に紅色の果実を枝に残し、数が多いと重みで枝がやや垂れ気味になる。葉も美しく紅葉するので、近年庭木や生け花によく使われている。名の由来は、七回かまどに入れて燃やしても、まだ焼け残るほど燃えにくいことによるという。実際に試したことがないので真偽のほどは分からない。5月中旬に枝先に白い花が塊りになって多数つける。一つ一つの花は小さいので目立たないが、多数集まって枝先に着くので、遠くからでも目に付く。構内には、数カ所に植えてあるが、花や実の着き方は年によって違うようである。



ナナカマド(2000.12.4撮影)
人文・法・経済学部前庭

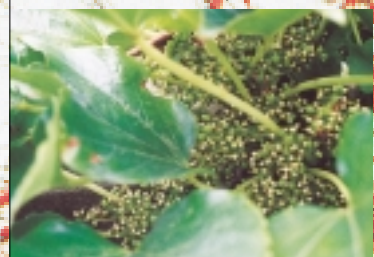
キャンパス植物歳時記

[表紙写真]

ツタ (ぶどう科)

つる性のツタには秋に落葉するナツツタと呼ばれている本種と常緑のフユツタ(ウコギ科)が構内に生育している。ツタは、立木の樹肌や壁の全面に葉を広げることがあり、秋に紅葉するので目立つ。構内では人文・法・経済学部講義棟学生玄関側校舎壁面に広がって繁茂し、秋に見事に色づき人目を引く。ツタはブドウ科の植物で真夏に開花するが、小さい花が葉の陰に隠れたように開き、すぐに花びらが落下するので、目にする機会は少ない。10月頃にはブドウのように房状にまとまってつき黒熟する。構内には各所に点在しているが、人文・法・経済学部のツタはそのまま建物壁面の全域に広がり、末長く目を楽しませてほしいと思っている。

ツタの古木(1999.10.29撮影)
人文・法・経済学部講義棟壁面
花(1991.8.1撮影)



広報委員会第1部会

●部会長

寺田 員人(歯学部)
Tel 227-2975 tera@dent.

●委員

増田 芳男(学長特別補佐)
Tel 262-6367 masuda@sc.

松本 彰(入文学部)
Tel 262-6519 matsu@human.ge.

石坂 妙子(教育人間科学部)
Tel 262-7146 ishizaka@ed.

西村 安博(法学部)
Tel 262-6842 yasuhiko@jura.

長谷川 雪子(経済学部)
Tel 262-6430 yhase@econ.

徳江 郁雄(理学部)
Tel 262-6112 itok-pc@sc.

山内 春夫(医学部)
Tel 227-2141 daba@med.

西村 伸也(工学部)
Tel 262-7217 shin-ya@eng.

屋代 眞(農学部)
Tel 262-6634 yashiro@agr.

佐山 光子(医療技術短期大学部)
Tel 227-2400 msaya@clg.

●事務局(学生部)

Tel 262-7330 Fax 262-7515
gakusei@adm.
(E-mailのアドレスは,niigata-u.ac.jpの標記を省略しています。)

編集 発行 新潟大学広報委員会
新潟大学学生部

この広報は再生紙を使用しています。

編集後記

本号の編集方針として、原稿や写真を出来るだけ電子媒体で入稿して頂くことにし、関係者の皆様をお願いしました。皆様のご協力で、原稿の90%以上を電子メールやFDで頂くことが出来ました。これにより、編集・校正作業が軽減されることを期待しています。

初稿の時点で、やっと全ての原稿が集まり一安心しております。原稿執筆者の皆様には心からお礼申し上げます。(編集担当:徳江郁雄)

本号は卒業特集号です。大学、医短、大学院を卒業される30名の学生さんと、定年退官という形で卒業される21名の先生方からご寄稿いただきました。それぞれの思い出の中に新潟大学の歴史が刻まれております。多くの方々の卒業という新しい門出を祝いながら、新大広報も21世紀の新たなスタートを切ることになります。お互いに頑張りましょう。(編集担当:山内春夫)